

ジイジ・バアバ、
パパ・ママへ贈る

アヤと過ごすジイジの日記

心のめばえ

<6>

著者／牟田 泰三
挿絵／橋本 礼子

お話ししよう

どの幼児を見ても満三才頃にはいろんな単語を口に出して言うようになる。パパ、ママと言ってくれると親たちは大喜び。そのうち爺ちゃんや婆ちゃんを指さして、ジイジ、バアバと言いつつ始め、身近なもの、例えばワンワン、ニャンニャン、チッチ(小鳥)、マンマ、と驚くべきスピードで次々と単語を覚えていく。

さらに驚くのは、車に乗せて移動したところはしっかり覚えていて、スーパー、病院、コンビニ、銀行などの名前を正確に言っている。アヤとお話しすると、ママの日常の行動が手に取るように分かってしまう。満三才頃には二次元的な地形感覚がすっかり身についているようで、アヤの心の中では自分が見た光景の地図ができているのであろう。

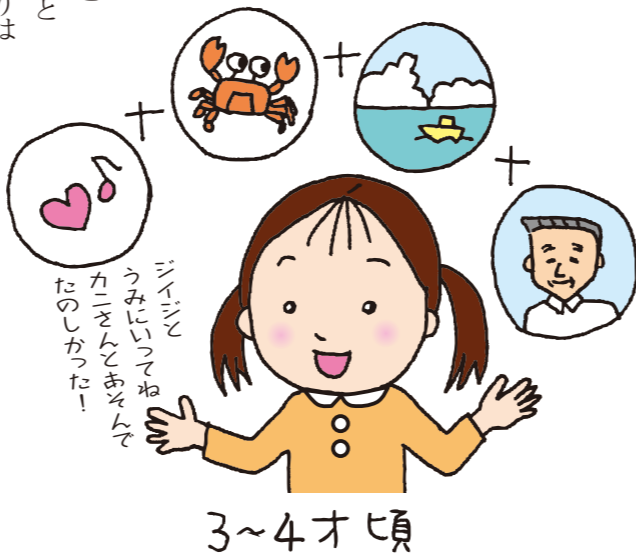
単語はすごいスピードで覚えていくのであるが、幼児が考えていることを大人達に伝えるためには、まだまだ語彙数が足りない。それに、もともと重要なことは、文章構造が出来ていないことである。幼児の心の中では、「自分はこうしたい」と思っているのに、「ママ達はちつともわかってくれない。」という漠然たる不満感があるのではないだろうか。

この段階では、あくまで発信者は幼児の側であって、パパ、ママ、ジイジ、バアバにとっては、アヤが発する信号を受け取ることしかできない。大人の側が発信する信号はわずかしかアヤには受け取ってもらえない。

乳幼児が暗黙知の世界から形式知の世界へデビューするためには、単語がつながって文章にならないといけない。それには満三才頃まで待たなければならない。

満三才ぐらいになると、それまで単語だけだったコトバが、単語のつながった一連の熟語となる。「小さいカニさん」とか「お腹がすいた」とか。それが、あまり時間をおかずに文章となりはじめる。「チッチが庭にいたよ。」とか「テレビ番組でワンワンはもう見ない、ニュースにして。」などと生意気なことを言うようになる。こうなってくると、大人側の話も理解できるようになる。遂には、大人側はアヤと取引ができるようになる。

「ご飯を全部食べたらいすあげるからね。」
「お買い物しましたら、公園に行つて滑り台しようね。」
こうしてアヤとの交信が進み、アヤの内部に芽生えつつある思いやりの心を探知できるようになるのである。



ジイジより



読者の皆さんにお願いです。「心のめばえ」をお読みになって、感じられたこと、子育ての中の気付きなどを、お気軽にお寄せください。連載を進めていく上でジイジの参考になります。

ジイジへのお便り

エッセーを読んだ感想などを、お寄せください。
weekly@pressnet.co.jp
「心のめばえ」系へ

プロフィール むたたいぞう 1937年、福岡県生まれ。九州大学理学部卒業、東京大学大学院物理学専攻修了、理学博士。京都大学助手、助教、広島大学教授、学長、福山大学学長などを歴任。主な著書に「語り継ぎたい湯川秀樹のことば」(丸善出版)、「電磁力学」(河合書店)、「量子力学」(裳華房)などがある。東広島市在住。